

復活節第6主日礼拝

2023年5月14日（日）

題 「母と子の関係」

テキスト：ルカによる福音書7章11～17節

皆さま、おはようございます。

今日は母の日です。すべての人に母親がいます。みなさまのお母さまはどのような方だったのでしょうか？本日は「母の日」を迎えまして、皆さまと共に礼拝を捧げることができますことを嬉しく思います。

母の日を祝うことは、世界中にあるようですが、日本では、明治末期頃にアメリカのキリスト教会からカーネーションをつける母の日が伝わり、1915年(大正4年)に教会で行われてから、一般にも少しずつ広まっていったそうです。1937年(昭和12年)に森永製菓が全国的に母の日の行事を行い、その影響で母の日は全国的に広まり、1947年(昭和22年)に、公式に5月の第2日曜日が母の日となったそうです。

ところで、今日の聖書の箇所は一度聞いたら忘れられないような内容です。

「◆やもめの息子を生き返らせる」この出来事は何度読んでも、あまりに衝撃的なように思えます。時は今から約2000年ほど前のイスラエル・ユダヤでの出来事です。

聖書には「11:それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。」と記されています。ガリラヤ地方のナインという町、村のような小さな町です。ちなみに聖書の後ろにある聖書地図の6頁を見ると、新約聖書のパレスチナの地図があります。その上の方に文字でガリラヤ地方と記されていますが、その文字の下の方にイエスさまが育てられたナザレの町があり、その近く下の方にナインの町があります。この時イエスは、ナインの町に行かれたのです。

12:イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるころだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。

現在「やもめ」という言葉はあまり使いませんが、この場合、母親には夫はおらず一人息子と2人で生活していたと想像します。その一人一人息子を失ったのです。その女性の悲しみは計り知れないものがあると想像できます。

今回のメッセージづくりの準備の中で、わたしは20歳代の頃、京都の教会で

伝道師そして副牧師をしていたことがあるのですが、毎週そろって礼拝に出席されていた、ある教会員のご夫妻のことを思い出しました。

そのご夫婦は、二人の男の子を亡くされた方でした。一人は小学校内の事故で、もう一人はその後妊娠し出産されたのですが、死産だったのです。彼女はいきさつを坦々と語っておられました、どんなに辛い苦しい経験をされたことでしょうか。人生にはこんなにも辛いことがあるんだと思わされていました。ご夫妻は今千葉県にお住まいで私たちが洲本に来てからも電話を頂いたり、年賀状で近況を確かめあっています。

聖書に戻りますと、当時「やもめ」は、地域の中で白い目で見られていたそうです。差別の、差別意識の強い時代だったのです。そのような中での出来事です。

イエスはこの場面に出会われたのです。

13:主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われました。「主」とありますが、これは旧約聖書では「天と地を、命を創造された神」を呼ぶ時に使われる名です。主よ！と。聖書記者であるルカは、ここでイエスに対してその「主」という言葉を用いているのです。ルカの信仰からくる言葉だと思います。後の初代教会の時代、イエスに対する信仰の告白として、

「イエス・キリストは主である。」との信仰の告白がなされ今日までキリスト教会では続いているのです。「13:主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。」のです。この「憐れに思い」という言葉は新約聖書原語のギリシア語では「腹わたがちぎれる」ということばが使われています。これは単なる同情ではなく、イエス自身「腹わたがちぎれる」ほどの思いになられたということです。これがイエスの愛だと思います。そして母親に向かって、「もう泣かなくともよい」との言葉を語られたのです。

そして、

14 節「近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われまし

た。ちなみにこの当時の棺は、今で言えば板のような簡素なもので、それに布がかぶせてあるような状態で、死者は野辺に運ばれて埋葬されたようです。当時、棺に手を触れることは、やってはならないこととのユダヤ教での宗教上の厳しい決まり事があったのです。死人に触れることは穢れることとの誤った考え方がユダヤ社会を支配していたのです。神の子イエスが、その戒めを、愛の心で打ち破って行かれたのです。

このことが十字架に至るイエスの道となったのです。当時の宗教的権力者たちはこのような行動をするイエスをほってはおけず、ローマ帝国の権力を借り

て十字架の死に追いやったのです。現実世界の闇の深さを思わされます。

15:すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

肉体の死は起こります。しかし、神の子イエスの愛は、永遠の命として残り続け、死の現実を超えてつながる命の世界をもたらしてくださるのです。

死は、関係の喪失状態と言います。イエスの愛は、その壊れた関係、破壊された関係を再び造り上げて行く命の関係をもたらしてくださるのです。わたしたちの日常生活の中にです。家族の中に、教会の中に、地域から社会、そして世界へと、愛と命の関係の生命力は広がって行くのです。

日本には、母親と子の関係は特別だと言われることもありますが、実は母親と子の関係はそう単純ではない、との心理学的な研究が最近進み、そのような本もよく出ています。精神科医の香山リカさんの「親子という病」という本もあります。子が母親の支配下に飲み込まれているケースもあるということです。またその反対もありえるのです。

イエスは、子を母親にお返しになった。新たな母親と子の関係が始まっていくのだと思わされます。

この驚くべき出来事を見た、出会った人々は、

16:人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

17:イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

今日、わたしたちは愛なる神さまによってこの礼拝に招かれています。

福音書を読むと主イエスがたびたび死んだ者をよみがえらされた、いわゆる「奇跡物語」が出て来ます。今日の箇所もそうです。この「奇跡物語」を私たちは、どのように受けとめたらよいのでしょうか。イエスの深い愛が、死んだ者を生き返らせてくださったのです。たとえ知識として理解できなくても、主イエスにつながる永遠のいのちがあるのです。

最後に、星野富弘さん詩に曲をつけた歌を歌わせて頂きます。

星野富弘さんは、学校の教師をされていましたが、事故で首から下が動けなくなり、病院に入院され寝たきりになり 9 年間過ごされました。その時から、お母さんに介護をしてもらった星野さんが口に絵筆を持って描いたお花の絵に詩を添えられお母のことを思われた詩があります。「ばら・きく・なずな」の花に添えられたことばです。

「淡い花は 母のいろをしている 弱さと悲しみが 混ざり合った 温かな

母の色をしている。」

「神様が たった一度だけ この腕を動かして下さるとしたら 母の肩をたたかせてもらおう 風に揺れる ペンペン草の実を見ていたら そんな日が本当に来るような気がした。」

「母の手は 菊の花に似ている 固く握りしめ それでいてやわらかな 母の手は 菊の花に似ている。」

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。 共に黙想しましょう。